

特集 「英語教育はどうあるべきか」 Part 1

英語教育の根本とは何か(1)

新学習指導要領と NEW CROWN

森住 衛

(大阪大学教授)

1. はじめに

21世紀の幕が開いた。新しい世紀になったからといって、何かが大きく変わるわけではない。昨年からの年越しも、毎年味わっている通過点である。しかし……である。人間の営みの中で数字の大きな変わり目のときは、今後のことを改めて考えたい、何か新しいことをしたいと思うのが、人の常であろう。何かを考えたり、新しいことをする場合、一般には、これまでやってきたことの総括や評価をしてから行う。そして、この際に最も大切なのは「根本は何か」という問いかけである。これがないと時代の表層の変化に流されてしまう。本来の目的を失ってしまう。

折しも、学校教育は2002年4月から新しい衣を着ることになった。中学校の英語教育も新学習指導要領(外国語)によって提案された内容で新しい世紀に乗り出す。本稿では、このいわば「中学校英語教育丸」の船出を前にして、NEW CROWN と学習指導要領との関係、時代の変化に対する立脚点などを中心に、英語教育の根本は何かを考えてみたい。

2. 指導要領の理念と合致している教科書

教科書は学習指導要領に則って編集される。この学習指導要領との関係で、これまでのNEW CROWNを総括すれば、NEW CROWNは学習指導要領の理念を最も端的に具現してきた教科書といえる。極論すれば、学習指導要領の理念を先取りしてきたともいえる。まず、前者の具現という点から取り上げたい。古い話になるが、学習指導要領の目標欄で広く「外国の人たちの生活を扱う」とされていながら、英語教科書では長い間、外国の人たちを英語圏、特に英米人に限定して扱っていた。これは登場人物を見るとわかる。いわば主人公役ないし進行役の中学生は長い間、アメリカ

人の中学生という時代があった。その名前で一世を風靡した教科書もあった。これが大きく変わってきたのは、1978(昭和53)年度版のNEW CROWNからである。現在のように、日本人2名、そして英語圏、中国、ケニアの中学生というように、「外国の人たち」の配置に偏りがなくなった。日本人の登場人物を中心に上げてきたのもNEW CROWNである。今では何でもないようなことであるが、当時としては新しかった。そして、これも、日本人が積極的に英語を使っていくという学習指導要領の底流に流れる理念に合致したものであった。現在ではほとんどの教科書がこれに準じている。さらに、外国人に多様性が出てくれば、扱う地域も変わってくる。「国際理解」や異文化理解に必要なこの多様性も、NEW CROWNは、いち早く取り入れてきた。ケニアやシンガポールなどアフリカやアジアの国や地域を比較文化的な視点で本格的に取り上げたのは、明治以来NEW CROWNが初めてである。

「人」・「地域」ときたら次は「言語」である。衆知のように、私たちが担当している教科は「外国語」である。新指導要領では必修になったが、「外国語が必修」という意味である。指導要領のこの理念は長く続いているが、表見返しや本文でこれを具現してきたのもNEW CROWNである。世界の言語という見返しで、英語を「科目」として学ぶが、広く外国語に興味・関心を持つという姿勢を出してきた。本文でも英語以外の外国語を出してきた。これは、指導要領の精神と合致している。

3. 指導要領の内容を先取りしてきた教科書

先取りしてきた例もある。今回の新指導要領では文字の草書体(一般に「筆記体」と言われてきているものであるが、この呼称は誤解を招く恐れがある)は「必ずしも扱う必要はない」としている。字体

については *NEW CROWN* では 1981(昭和 56)年度版から、楷書体(ブロック体)を第一義として、草書体は参考までに載せるという方針できた。そして、新指導要領ではそうだった。文字といえば、1年の LET'S START で、アルファベットを扱ってきたのも *NEW CROWN* の特徴である。いわゆるコミュニケーションの時代が来て、アルファベットを教科書本体の冒頭で扱うのは時代に合わないという意見もあったが、初版以来変わることなく本格的な扱いをしてきた。本格的な扱いというのは、見返しなどの扱いではなく、文字と音の関係を指導できるようにしてあるということである。新指導要領ではどうだろうか。当然ながら、文字指導の必要性は明らかにしている。文字は、これからの中学英語教育においても、ますます重要である。小学校の外国語会話の「聞く・話す」導入で、中学の英語教育のアイデンティティーのうちのひとつは文字指導である。現実的にもインターネットは電子メールでは文字を読んだり書いたりしなければならない。この点でも *NEW CROWN* は早くから現在の事態にも対応していたと言える。さらに、細かいことであるが、文法用語がある。すでに気づいておられると思うが、新指導要領には「未来形」という言い方がなくなった。つまり、「go は現在形、went は過去形、will go は未来形」などとしてきたのであるが、最後の「未来形」がなくなったのである。will は現在形である。そこで「未来をあらわす言い方」などになった。*NEW CROWN* の【文法のまとめ】や TM などでは、この「未来をあらわす言い方」を使っていて、「未来形」なるものは認めてこなかった。これも先取りの例といえる。

4. 時代を予測してきた教科書

指導要領だけでなく時代そのものを予測してきた。現行版でいえば 1 年 1 課の Kato Ken に見られる日本人の表記法である。すでにご存じの方も多いと思うが、先般(昨年 9 月上旬)に国語審議会が中間報告として、日本人名が英語など欧米語の中で使われる場合、これまでの「名 + 姓」でなく「姓 + 名」の順序で表したほうがよいという提言を出している。これは、NHK や民放のテレビやラジオでも放送され、さらに、11 月上旬に読売新聞および *The Daily Yomiuri* の社会面で取り上げられ

た。報道によると、現在、検定中の中学英語教科書の大半(7 社中 6 社)が 2002 年度からの新教科書で「姓 + 名」の順序を採用することである。*NEW CROWN* は、1993 年度版から本課本文でこの順序を採用してきた。さらに遡れば、1987 年度版の 2 年の LET'S TALK で Sato Goro と出している。つまり、10 年余以前からこの方式を提唱してきて、現在、教科書の大半がこのようになろうとしているのである。



Book 1, LESSON 1 1

なぜ *NEW CROWN* が「姓 + 名」の順序にしていたかは、本誌 31 号の拙論で多少とも詳しく触れたが、要約すると次の 5 点になる。

- 1) 姓名の表し方は、個人や民族のアイデンティティーの象徴である。できるだけ原名に近い表し方がよい。地図上の都市名、地名なども原名に近い表し方に移行しつつある。
- 2) 日本人が自己紹介などで「名 + 姓」を使うのは、異文化理解の本質にも反する。異文化理解の本質は「Difference is beautiful.」であるのに、出会いの最初から相手に合わせた言い方になってしまう。
- 3) 「名 + 姓」を基準にして、たとえば、Suzuki Taro という人が、My first name is Taro. などと言うのは、事実誤認で、日本人の最初の名前は Suzuki である。
- 4) 母語で「姓 + 名」の順序としているのは、東アジアの漢字文化圏やウラルアルタイ系の言

語圏に多いが、この中でその国民の大半が順序を逆にしているのは日本だけである。

5) <姓+名>の順序の方が、社会生活を行うにあたっては合理性に富んでいる。旅券の氏名の順も<姓+名>になっている。

先の読売新聞の報道にあるが、これは「利便性」が「アイデンティティー」かの問題で、是非論は分かれる。特に、個人の名前は各個人が決めることで、強制はできない。そのために、*NEW CROWN*では、英語式の言い方もあると添え書きしている。今後の趨勢としては、日本式の<姓+名>になっていくと思うが、要は、言語使用に関してはこの種のアイデンティティーや社会性の問題があるということを生徒に気づいてもらうことである。これまでは何も考えずに<名+姓>にしてきたきらいがあった。

5. 題材を強調してきた教科書

日本人名を Kato Ken のように<姓+名>の順序にするという提案は、最終的には、言語材料にどのようなメッセージを持たせるかという問題に行き着く。メッセージは題材内容である。*NEW CROWN*は、その最も大きな特徴として、1978年の初版以来、教科書本文の題材に最大の力点を置いてきた。ことばは、それがどんなに簡単な表現であれ、その中身が重要である。生徒たちは13歳から15歳の多感で精神活動が本格的に開花する時期にさしかかっている。たとえ、外国語であろうと、読んだり書いたりするものには、気づいたり、考えたりするきっかけを盛り込みたい。知的にも情緒的にもインパクトがあるものを提供したい。たとえば、現行版の1年の第1課は、Kato Kenの問題に続いて、もうひとつ題材の工夫を施している。トム(Tom)が、健(Ken)の机を指して Is this your desk? と聞き、Yes, it is と言われると、'Nice.' と反応する。一般にアメリカ合衆国の子どもは自分の机を持っていない。そこで、'Nice.' と言ったわけであるが、1年次冒頭の簡単なやりとりの中にまで、このような気づきや思考の「触媒」に資するものを入れている。内容が難かしいという向きもあることは承知しているが、このようなメッセージの内容がないと、本来のコミュニケーションは期待できない。また、新指導要領でも謳われて

いる「自ら考える力」の育成にも役に立たない。

一口に題材といってもその内容は広い。詳しくは本誌別稿を読んでいただきたいが、大別すると、ことばの教育に資する話題、異文化理解教育に資する話題、人間教育に資する話題の3つになる。本課や LET'S READ では、これらの3つをバランスよく扱うようにしてきたが、さらに、LET'S TALK や LET'S LISTEN などの「話す・聞く」言語活動にまで応用するようにしてある。これも、'How' とともに 'What' を重要視している *NEW CROWN* の方針の一環である。

6. おわりに

誤解を招くかもしれない。しかし敢えて言うと、*NEW CROWN* は「ラディカル(radical)」である。日本語の「ラディカル」は「急進的な」「過激な」などの意味で使われることが多いが、英語の 'radical' の原義は「根本に基づいている」である。'radish' は「(はつか)大根」で文字通り「根っこ」である。tradition も「根っこ」をもっているから「伝統」である。*NEW CROWN* は、これまで根本に関係することを、あるいは根本に存在するものを志向して、現場の先生方と共に歩んできた。根本にかなっていれば、表層の変化に対応できる。たとえば、*NEW CROWN* の3大理念は「ことばの教育」、「異文化理解教育」、「人間教育」であるが、これを初版から今日まで変えないできている。先に示したアルファベットの字体についての提案も、当初は「ラディカル」に見えたかもしれないが、根本にかなっているから、そこに収束しようとしている。これらは、根本を押さえさえすれば、世の中の多少の変化にも耐えられるという証左ではないだろうか。

中学校の英語教育は、2002年からは「週3時間」復活という苦しい状況で始まる。このときに「基礎・基本」をどうするかなどの大きな問題が出てくるだろう。このことについては、次号の本稿(2)で取り上げるが、基礎・基本は周囲の変化にいたずらに揺れ動くものであってはならない。これは、教科書の編集の姿勢にもあてはまる。英語教育の「根本」とは何か。これからも忘れないようにしたい。